

論文概要(詳細版)

庶民生活史料の歴史民俗学的研究

渡部 圭一

ローカルな生活習俗が文字とのかかわりを深め、文字の独特の存在感が高まり、もはや地域社会としての“文字の文化”と呼ぶほかない現象が現われることがある。にもかかわらず前近代の読み書きのコミュニケーションに対する理解は、多くが近代的なステレオタイプに左右されており、生活史としての読み書きの伝統に迫る論点の構築は立ち遅れている。これを打開するには、行政上の“公”的文書を中心とする近世史研究や、庶民のリテラシーを村請制の前提として限定的に捉えてきた前近代教育史とは異なる観点として、生活実践と一体化した“私”的文書を積極的に扱う歴史民俗学によるアプローチが有効である。本論文では、これまで等閑視されてきた庶民生活史料を取り上げ、近世後期における読み書きの質的成熟の過程を明らかにするとともに、これと呼応する史料学のあらたなモデルを提示することを目的とする。

歴史民俗学的な文字文化研究では、旧来の“口頭伝承偏重”の民俗学批判を標的に掲げ、具体的には書物・出版文化の受容相、とりわけ生活習俗に対する歴史的な影響や交流関係の考察に成果をあげている。一方で、読み書きそのものを主題化する十分なモデルはなく、その論理的展望にはある種の閉塞感も漂っている。その原因は、従来の文字文化研究が「非文字文化」との二分法的な関係論に依拠し、対比的なカテゴリ相互の親近性や同質性の評価に収斂してきたことにある。かりに文字文化なるものが、これまで民俗学が扱ってきた対象とさしたる差異をもたないなら、あえて文字文化というジャンルを設定することに疑問符がつくのは当然の帰結である。文字文化研究の自立的な展開にむけて、出発点となるのは文字媒体のもつ異質性を再認識することである。これをふまえて本論文では、つぎの順に議論を進める。

まず第1章・第2章は、これまでの文字文化研究の論理構成の批判、およびそれに代わるモデルの提示を目的とする。第1章では狭義の文字文化研究として歴史民俗学の動向をレビューし、同質性評価にかたよった文字文化研究の問題点、および読み書きをめぐる異質性を埋没させてきた背景を明らかにする。テキストの内容面を中心とした同質性評価の議論から、読み書きの形式面、すなわち文字がもつ媒体レベルの特質へと眼を開いていく方向性の意義を、ここで浮き彫りにする。この検証をもとに、第2章では従来欠けていた分析枠組みとして、史料学におけるコンテキスト概念をあらたに提示する。書かれたテキストが現実には生起させる意味と、その意味の表われに介在する文字の独自のはたらきを正面から捉えるためには、読み書きの結果としてのテキストを単独で切り取っていく考察ではなく、テキストの意味の生成を一種の状況依存的なプロセスとして受け止めるコンテキスト主義が不可欠である。

第1章「異質性」の復権——文字文化研究モデルの再構成①——では、歴史民俗学における狭義の文字文化研究の課題を明らかにする。文字文化研究の意義は、“民具としての書物”の発見など、旧来の「偶然記録」

としての史料認識に刷新を迫る点にあるが、その反面、「非文字文化」との同質性評価を急ぐ論調にはいくつかの錯誤も潜んでいる。ひとつは、従来の民俗学に対する“口頭伝承偏重”という批判自体が適切な学史認識ではないことであり、もうひとつは、そこで語られる「非文字文化」なるものはじつは明確な規定を欠く空疎なカテゴリにすぎないことである。さらにこの議論にとって、主たる論拠は異種テキスト間の“内容”面の親近性に求められやすく、文字そのものがもつ“形式”面の属性は埋没しがちである。文字文化を文字文化たらしめている契機に迫るには、テキスト単独の内容分析ではなく、読み書きに固有の形式の問題を主題に据えていく必要がある。

第2章「コンテキストの史料学——文字文化研究モデルの再構成②」では、広く史料学の動向のなかで前章の議論を敷衍させる。とくに最近注目されている、客観的なできごとに対応しないイマジナリーな史料、たとえば由緒書・偽文書・系図・絵画等の史料に関する知見を踏まえると、書かれたテキストがつねに“文字通り”の意味作用をもつという前提への疑いが浮上する。書かれたテキストが現実を生起させる意味と、その意味の表現に介在する文字のはたらきを注視する態勢は、テキストの意味と個々の場の結びつきに最大限の関心を注ぎ、その意味の生成を一種の状況依存的なプロセスとして受け止める分析枠組み、すなわち史料学のコンテキスト主義とよぶことができる。文字化されたテキストが、文字化されているがゆえに生成させる意味をとらえることが、文字文化研究としての論点の自立のための出発点である。以上の問題意識と方法に即して、第3章から第6章では、対象をそれぞれ異にするモノグラフを提示する。

以上の課題をふまえ、第3章～第6章の各章では4つの事例分析をおこない、これを以下のとおり構成する。まず第3章・第4章では、由緒・歴史意識に関する史料像を再検討する。すなわち第3章では近世後期～明治期における関東村落の地域神職による由緒編集、第4章ではやはり同時期・同地域の同姓集団における家の由緒と関わる石塔・墓地景観の再編という、村落の歴史認識をめぐる一種の紛争（論社争い・本家争い）と史料管理に関わる事例分析を配している。一方、第5章・第6章では、隣接分野も含めて研究例のごく乏しい題材として、いわゆる“儀礼のための文書”とその音声表現を取り上げる。第5章では、浄土真宗村落における聖教の伝世例、第6章では祭祀組織における長期的な記帳史料の伝世例を、それぞれ俎上にのせている。

第3章「書物のコンテキスト」では、古代の神社名簿である延喜式神名帳の受容を取り上げる。写本として流布した巡拝案内書が示すように、近世後期には延喜式神名帳に記載された社号を名乗る神社が増加するなど、総じて式内社の実体化が広くみられる。その主要な担い手となった地域神職には、論社との競合関係のなかで、多様な媒体を利用し、式内社号の書き写しや視覚的な掲示・表示に執着する姿が認められる。ここで式内社号とは、口頭社号とは異質な“見せる社号”として操作・表現される性格を強め、神職の書写行動もまたそれ自体が由緒を実体的・可視的に表現するという実践を構成することになる。読み書き・読書とは、知識の伝達や獲得の便宜的手段であるだけでなく、それ自体が表現活動としての意味を持ちうるのである。なお本章では、多数の論社の存在で知られる武蔵国式内社群、およびその典型として、内務省伺いに発

展した集落神社レベルの論社紛争の一例（埼玉県所沢市三ヶ島）における由緒史料を検討対象とする。

第4章「石造物のコンテキスト」では、やはり地域の由緒に深いかかわりをもつ石造物として、石塔（近世以降の石造墓標）を取り上げ、死者供養の媒体である石塔が、本家分家集団における由緒の競合のなかで二次的に意味づけられる状況について考察する。近世後期の石塔には、死者供養の儀礼の場と結びついた一過性の媒体から、長期的に管理・操作される由緒上の媒体への変化が起きている。この変化には、石塔の“文字塔”化、すなわち蓮台を含む石塔の大型化や光沢の強まり、銘文の顕在化などが伴っている。儀礼の場をこえた石塔の社会的意味は、近世後期の死者供養をめぐる物質文化の展開、とりわけモノとしてのかたちと銘文とが作り出す“見せる石塔”の出現に契機づけられていたのである。なお本章では、関東地方村落に広くみられる同姓集団の共同墓地管理（埼玉県所沢市三ヶ島堀之内）に関連する石造物（近世石塔）を検討対象とする。

史料上の文字表記を視覚媒体として捉え直し、史料学の視点をさらに微視的な知覚レベルの場に及ぼしていく上で、身体や声を伴う儀礼と読み書きの関わりの深さは注目に値する。第5章「聖教のコンテキスト」では、浄土真宗の聖教の書物とその拝読・唱和の関わりを分析する。これまで声の習俗の研究のなかで二次的・従属的な扱いに甘んじてきた“台本”の動態は想像以上に複雑で、本の字面を眼で追うときの視覚効果とそれを声に出すこととの緊密かつ瞬間的な結びつきが認められる。ここでは聖教の「本」が可視的な媒体としてはたらく場を、身体と五感のレベルにまで降りたって精査する。とくに興味ぶかいのは、これらの聖教のテキストは儀礼的な拝読・唱和の場を離れては意味を持ちえない点である。声の習俗にとって、外在的な文字媒体を得ることが、ただちにテキストの意味作用の脱状況化を招くとは限らないのである。なお本章では、いわゆる安芸門徒の分布域である瀬戸内海島嶼地域（愛媛県今治市大三島）で、戦国期から現在に至るまで在家のあいだで管理・使用されてきた書物史料を検討対象とする。

このような声の習俗の場への収斂・依存に対し、一次的な儀礼の場を相対化する契機のありかを考察したのが、第6章「帳簿のコンテキスト」である。事例とする宮座の差定状と頭役帳は、ともに差定（宮座の頭役の選定）の記録として作成され、今日も厳重な管理下にある。前者は神体授受の儀礼で声によって読み上げられ、その場かぎりで神聖な意味を発揮する。ところが同一のテキストは写本として帳簿に綴られ、神事の場を離れて参照される。とくに18世紀末以降には帳簿の参照性が強まり、複雑化する頭役の選定や神事秩序の再編をはじめ、新たな機能を派生させる。テキストの文字表記を契機として、先例の参照や学習の文脈が生まれ、二次的な場で新しい意味を形成する様相が認められるのである。なお本章では、長期的な記帳史料を擁する近畿地方の頭役祭祀（滋賀県野洲市大篠原）を例に、戦国期から現在まで管理されてきた特徴ある差定史料を検討対象とする。

第7章「コンテキスト史料学の射程」では、1980年代末以降の口承や身体の研究を振り返ることで、前章までのコンテキスト主義の史料学の到達点と将来展望を明らかにする。伝承母体論以降の戦後民俗学の総体にとって、コンテキスト主義の前進は徐々に必然的なトレンドになっている。とはいえ face-to-face のミク

ミクロな場への議論の収束を避けるためには、場の多層的な把握が不可欠である。そのひとつの方向性として、史料をめぐるテキストと場の関係を複雑化・重層化させていく読み書きの事例研究は有望な位置にある。ミクロな場に内在する媒体を契機としたコミュニケーションの質的変容、とりわけテキストを一次的な場から逸脱させ二次的な場を生み出す動態（脱=再状況化）への注目がそれにあたる。

以上をうけ、本論文の結論はつぎのようにまとめられる。読み書きとは、何らかの知識や情報の伝達のための間接的・二次的手段ではなく、あるコミュニケーションの場では、読み書きすることが、あるいは書かれた文字が、はじめてテキストに現実的な意味をあたえるのである。ここでは従来見過ごされてきた読み書きの“形式”面の特徴が明瞭になる。ひとつは、文字テキストの意味生成の過程における視覚表現（文字表記）のはたらきが介在することである。これはまた身体や音声といった、相互に異質な表現媒体どうしの関係が生まれる契機でもある。もうひとつは、そのような媒体相互の関係をともなうがゆえに、場を離れたテキストの表現効果が封じられる傾向（状況依存性）が生まれることである。

この知見は、2つの角度から位置づけられる。第一に通時的視点によれば、上記の見解は、あくまで文字文化の歴史的局面のひとつを指しており、庶民層の生活実践に読み書きが習俗化したステージを前提に、そこでの読み書きの質的成熟を明らかにしたものである。ここでいう読み書き活動の習俗化とは、“私”的領域における膨大な生活史料を生み出してきた最も重要な契機である。従来の文字文化・文書社会像は、近世のいわゆる“識字率”の向上を前提にして文書主義と文字教育を位置付けつつ、中世、近世、近代と続く識字層の量的拡大のひとつの段階を、村請制下の村に見出してきただけで、多彩な習俗態としての“私”的史料の実像はとうていそれに収束しない幅をもっている。このような文字文化の質的充実の画期は、18世紀末～19世紀という時期に求めておくのが妥当である。

第二に共時的視点によれば、本論文の知見は、史料の機能に関する一種のステレオタイプを排し、あらたなモデルを提示する点に意義がある。口頭伝承との対比による読み書き論では、その固定性や安定性が無批判に前提とされ、書かれたものがそれ自体で完結したコミュニケーションを形作るものとみなされがちである。この単純化された通説の背景には、文字化されたテキストがみずから“文字通り”の意味を伝達することを自明視する前提が横たわっている。だが現実には、文字化テキストの意味作用とはより複雑かつ状況依存的な現象である。これまで文書伝達の特徴と目されてきた脱状況化、つまり時と場をこえたメッセージ伝達の安定性や固定性もまた、読み書きの本質的な属性というより、テキストの意味と場の関係のヴァリエーションと認識すべきなのである。対面のミクロな場への矮小化に陥らないコンテキスト主義の構想という、今後の文字文化研究の新たな発展の方向性がここに予告されている。